

日本大学工学部校友会

校友会報

第86号

令和5年3月1日

INDEX

- ごあいさつ 2
- 令和4年度通常総会について 3
- 第39回「母校を訪ねる会」を開催 3
- 母校を訪ねる会の様子 4
- 支部活動報告 16
- 校友会より 19
- あかしや建友会 19
- 日本大学工学部が推進する産学官連携活動(6) 20

- 日本大学工学部での思い出とボランティア活動 22
- 学生の活躍 23
- 令和5年度通常総会通知 24
- 第40回母校を訪ねる会 24



表紙のQRコードをスマートフォンで読み取ると、校友会のホームページ(校友会について・ニュース・校友会便り・校友会報等)をご覧いただけます。

北校祭最終日の花火



校友会会長 中野 伍朗

校友の皆様におかれましては、益々ご健勝、ご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は校友会活動に対しご理解とご協力を賜り心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルスによる影響で、母校キャンパスも予断を許さない状況が続いておりますが、例年校友会参加事業として行って参りました母校を訪ねる会が4年振りに開催されました。2日間にわたり卒業生約500名にご参加頂き、盛大に執り行われました。キャンパスツアー、校友茶会などその他の校友会参加事業も来年度以降、状況を鑑みながら再開に向け前向きに検討して参りたいと思います。

特にこの10年間では、東日本大震災による原発事故除染対応、大型台風19号による水損被害、新型コロナウイルスの感染拡大など、想定外の事象に多々見舞われました。工学部校友会としては、この時流の環境変化に適宜対応しつつ、学生ファーストの精神で、水害被災学生への寄付金募集、新型コロナ関連では経済困窮学生への給付型奨学金の拠出など、多岐に渡る学生支援活動を学部と連携を保ちつつ行って参りました。

一方、工学部校友会教員部会では、工業系高校の教職員が中心となって、大学との連携を進め、多くの優秀な生徒に指定校推薦制度を活用し、入学して頂いており、少子化が進む中、優秀な生徒の確保に一役買っています。

就職支援におきましては、文武両道の校風、環境の下で過ごし、また郡山という地域性の中で培われた大学への帰属意識、愛校心と共に、スポーツ・文化を勤しみつつ育ったバランス感覚に優れた学生を就職支援等を通じ、社会に送り出すことに寄与しています。

これら生徒の確保、就職支援事業につきましても引き続き活動して参る所存です。

そして今後も若い校友の皆様とも絆を深め、大いに参画・活動して頂ける開かれた校友会を目指して参ります。

また、工学部教職員の皆様からのご支援、ご協力に感謝申し上げます。これからも生徒の確保、学生支援、就職支援など、工学部ならびに工学部校友会が連携して車の両輪となり、母校の発展に寄与できれば幸いです。

最後になりますが、校友の皆様におかれましては、今後とも工学部校友会に対してなお一層の変わらぬご支援、ご理解を賜りますようお願い申し上げますと共に、皆様のご健勝、ご活躍を祈念して挨拶とさせていただきます。



工学部長 根本 修克

令和5年の早春を迎え、校友の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

令和3年の本学における不祥事によりまして、日本大学工学部校友会の皆様にも多大なご迷惑とご心配をおかけし、校友の皆様からの信頼を失墜させてしまいましたことに改めまして深くお詫び申し上げます。校友の皆様からの信頼を回復するためにも、令和4年7月より法人本部新執行部のもとで、工学部教職員は一丸となり、従来通り、一人一人の学生に真摯かつ誠実に向き合いながら、学生の教育・研究および生活のサポートにひたむきにあたる所存でございますので、校友の皆様には、今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

さて、工学部では、20年以上にわたり、「ロハス工学」を基盤とする研究活動を行って参りました。令和2年に立ち上げたロハス工学センターにおきまして、教職員のみならず学生の意見も取り入れながら議論を重ね、「ロハス工学」を体感できる新しい研究施設を令和4年度中に建造する運びとなりました。また、ロハス工学センター内において、学生が主体となり研究活動を行っている「LohasProLAB」の成果が、令和3年に続き令和4年におきましても医療機器設計・製造展示会のコンテストで表彰を受けるまでに至っており、今後も、ロハス工学センターを基盤とした研究活動をさらに充実させ、工学部の研究基盤となる「ロハス工学」に関わる研究成果を広く社会に発信して参ります。

一方、令和4年10月には、北桜祭および母校を訪ねる会を4年ぶりに対面形式で開催いたしました。今後も、アフターコロナを見据え、活発な人的交流を再開して参りたく存じますので、工学部校友会の皆様にもご協力を賜りたくお願い申し上げます。

結びに、自然災害などによりもたらされてきた度重なる苦難を工学部が乗り越えてくることができましたのも、日本大学本部校友会ならびに工学部校友会および他学部校友会、校友会各支部を通しての校友の皆様からの多大なるご支援の賜と衷心より感謝申し上げ、校友の皆様のご健勝とご活躍ならびに工学部校友会の益々のご発展を祈念いたしまして、ご挨拶といたします。

令和4年度第64回通常総会

令和4年4月23日(土)、工学部62号館3階大講堂において通常総会が開催されました。新型コロナウイルス感染防止のため、会場入口でのアルコール消毒、座席の間隔を空け室内の換気をするなど、感染対策を講じた上での開催となりました。

議事に先立ち議長に山本健史氏(建37)、議事録署名人に縫裕訓氏(機23)、小野信太郎氏(土29)、書記に西家千尋氏(建28)柳沼由美子氏(化30)、をそれぞれ選出しました。

議事では令和3年度の会務報告、一般・特別会計決算報告、会計監査報告が行われ、それぞれ承認されました。その後、令和4年度の事業計画、一般・特別会計予算の報告がなされ、承認されました。

総会后恒例の懇親会は新型コロナウイルスの感染防止を考慮して中止としました。



第39回「母校を訪ねる会」を開催



北桜祭と同日に行われている母校を訪ねる会が4年ぶりに開催されました。今回は今年度の対象学年とともに延期となっておりました過去3年分の対象学年もご招待致しました。そのため異例の10月29日(土)、30日(日)の2日間開催となり、両日で6学科総勢492名の校友のご参加をいただきました。元ラグビー日本代表で東芝ブレイブルーパス東京アンバサダーの大野均さん(機械49回)も参加され、多くの校友から記念撮影を頼まれていました。



懇親会では新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策のため、本来の立食形式ではなく、来場者各自にお弁当を配布する形となりました。また、アトラクションとして「鮪の解体ショー」を開催し、来場者に鮪の切り身をお召し上がりいただきました。最後に高柳朗第66代応援団団長によるエールが披露され、出席者全員が「校歌」を斉唱し、城座隆夫校友会副会長の三本締めで御開きとなりました。

今秋も感染対策を講じて開催する予定であります。対象学年の皆様のご来場をお待ち申し上げております。

※母校を訪ねる会は、該当年でなくても参加可能です。また、校友会幹事は全学科のメンバーが揃っていますので、お一人でも気兼ねなくご参加ください、対応させていただきます。



母校を訪ねる会



第17・18回卒 集合写真 (10月29日)



第27回卒 集合写真 (10月29日)

母校を訪ねる会



第28回卒 集合写真 (10月29日)



第37・38・47・48・57・58回卒 集合写真 (10月29日)

母校を訪ねる会



第19・29回卒 集合写真 (10月30日)



第20回卒 集合写真 (10月30日)

母校を訪ねる会



第30回卒 集合写真 (10月30日)



第39・40・49・50・59・60回卒 集合写真 (10月30日)

母校を訪ねる会に参加して



「第39回 母校を訪ねる会」に参加して

石川 幸夫（土木18回卒）

久しぶりの「母校を訪ねる会」は、天候にも恵まれて、今回は時間もありましたので、懇親会2時間前に到着し、母校の敷地を懐かしく散策させて頂きました。

当時の私の記憶にあるものは、学生食堂跡と、図書館跡で、新しくなった学舎に52年間の時間の流れを感じました。

北桜祭のイベント、各学科の研究発表等々を見ているうちに、その姿が若い時の自分に重なり、懐かしく思われました。16歳で父を亡くした私を、母は苦労しながら大学に通わせてくれました。

あの頃、希望と云うより、未来の不安の方が大きく、自分の力のなさに挫折して悩んだことも思い出されました。

私は、郡山市の清水台に下宿しておりました。よく大学から清水台まで歩きながら、未来の自分のあり方、夢等々を考えていたような気がします。しかしながら、あれこそが私の青春であったと思いました。そして担任の西村先生はじめ、たくさんの先生方、そして友人、周りの人達に支えられた時間を懐かしく思い出しました。

土木第18期は、今まで、同期で、地元の面倒見の良い郡山市在住の、日下健一君がまとめてくれていました。

彼は、今回の「母校を訪ねる会」で、同級生と会うことを楽しみにしており、皆も再会を期待していたのですが、訪ねる会の三日前に突然亡くなりました。そしてこともあろうか、「母校を訪ねる会」のその日に、通夜が行われることになりました。

「母校を訪ねる会」の終了後、私達は、日下君の通夜会場「郡山斎場」に行きました。日下君は、ふくよかな顔で私達を迎えてくれました。「彼は、こんな形でも俺達に会いたかったのかな」と友人の一人が云いました。

彼と学び、遊んだ日々のが思い出されました。私は、建築会社を経営し、郡山、福島、いわき、会津若松に支店を持っていますが、彼が、私の支店開設に本当に力を尽くしてくれて今日があります。彼がいなくては出来なかったのです。彼のことを思い出すと涙がこぼれました。

「母校を訪ねる会」は、別の形での私の一生の思い出になる出来事でした。

現在私は、75歳になりました。現在も、会社経営を

しております。まだ納得のいく形ではありません。この機会にもう一度、思いを新たにして、最後の力を振り絞り、後継者に事業継承をしようと深く考えました。

この度の思い出深い「母校を訪ねる会」を企画して下さいました皆様、関係者の皆様に、心より御礼を申し上げます。

母校を訪ねる会に参加して

濱井 和子（建築28回卒）

卒業から42年、母校を訪ねる会に初めて参加しました。学校を訪ねると、記憶になかった建物があちらこちらにあり、自分が過ごした時代との変りように、初めて訪れた感覚すら覚えました。管理棟およびモザイク壁画の棟を見て、桜並木を歩いたことや学友たちとともに大学案内冊子の表紙の写真に納まったことなどが思い返されました。校舎内では懐かしい面々に出会い、気分はすっかり学生時代に戻っていました。そして、互いの近況を語りあい、それぞれの活躍を知り、頼もしさを感じました。どうして今まで母校を訪ねる会に参加しなかったのだろうと後悔すると同時に、次回の卒業後50年の母校を訪ねる会にも是非参加したいと思いました。母校を訪ねる会開催にあたってご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。

思い起こせば、40年前はパソコンが将来的に普及する予感の時代ではありませんでしたが、自分のパソコンを所有するまでには至りませんでした。しかし、現在は誰もがスマートフォンやパソコンを所有し経済活動を行う時代になり、社会環境は激変しました。久方ぶりに訪れた母校においては教育・研究・開発など多岐にわたる分野を網羅するために、新しい施設が立ち並んでいることを容易に理解しました。そして、これからも社会のニーズを創造していく役割を担っていただきたいと思います。ここで学ぶ後輩たちが今後の社会発展に寄与することを大いに期待いたします。

母校を訪ねる会の日に開催されていた北桜祭も見学できました。学生たちは手際よく、明快な説明を行っていました。これからの未来を託す学生たちが自由に発想し活躍できる環境を少しでも整え、これからもつなぎ続けられるよう私も何か貢献したいと思います。

次回お目にかかる卒業後50年の時には母校がどのように変わっているのか、同輩の皆様はどのような人生を歩まれているのか、社会はどのようになっているのか、とても楽しみです。

母校を訪ねる会に参加して



初めて母校を訪ねる会に参加して

植木 一夫（土木37回卒）

3年前、同期の押田則雄君から「卒業後30年目の卒業生が招待される『母校を訪ねる会』が開催され、みんなで集まるので植木も参加しないか？」と連絡があった。「そうか。卒業から30年も経ったのか」と感慨にふけ、初めて参加の返事を出した。

それから会の当日まで、とても楽しみにしていたが、「母校を訪ねる会」の直前の台風19号による大きな被害のため、残念ながら訪ねる会は中止となってしまった。また、その後のコロナの影響もあり、次の会は10年後になってしまうのかと思っていた矢先、また押田君から「今年、母校を訪ねる会が再開されることになり、中止となっていた37回卒業生も出席できるよ」と連絡があり、喜んで参加希望を出した。

10月29日(土)当日、正門で学園祭の受付を済ませると、同期の連中がすでに待機していて、33年ぶりにもかかわらず、すぐにメンバー達の顔がわかった。

懇親会が始まるまで、校内を散策し、立派な70号館や50周年記念館にはびっくりしたが、部室棟を覗くと当時のままの状態で、自販機の間所も33年前と一緒だった。自分は土木研究会に所属しており、学園祭前に徹夜して部員達と展示物を製作したことを思い出し、胸が熱くなった。

楽しい懇親会の後は夜の郡山の街で2次会を開き、学生時代の話や卒業後33年間の仕事、結婚、家族等の話題で大いに盛り上がった。

その後、当時では考えられなかったLINEでグループ作成をし、早速、学園祭の二日目も見に行った畝目晴彦君と梶本寛昭君から「萬寿園」で回鍋肉（ホイコーロー）を食べている写真がLINEで送られてきた（萬寿園、あんなにきれいな店だったかな？）。

人生でたった4年間の学生生活だったが、貴重で濃密な4年間だったなと『母校を訪ねる会』に参加して感じた。訪ねる会に参加して本当に良かったと思う。

そして、このような機会をつくっていただいた日大工学部に大変感謝しています。

23年ぶりに母校を訪ねて

長倉 誠（機械47回卒）

今回、母校を訪ねる会の出席を決めたのは2学年上の先輩から出席した時の様子を聞いていたからだった。サークル活動をしていなかった自分にとって、4年時の研究室での生活が大学最終年ということもあり色濃く記憶に残っている。最上級生であると思ったが、配属された研究室には大学院生の先輩方が複数いて、一番下っ端として振る舞うなど、今思えば少し早く社会へ出た時の感覚を味わっていたのかもしれない。

卒業後は新幹線や自動車で郡山を通過するばかりで車窓から遠くに見える、校友会報で設置されたことを知っていた風力発電装置のプロペラとぼんやりとみえる学校をとりまく木々を眺めては学生生活を思い出していた。4年ぶりに母校を訪ねる会が開催される通知を頂き、僕は2度目の出席がきを投函した。先輩おすすめのキャンパス散策ツアーが行われないのは残念だった。

「何回生になるの？」と郡山駅から出る無料シャトルバスを待ちながら年の離れた大先輩に声をかけられ自然と笑顔になった。初対面ではあるが同じキャンパスで同じように学生生活を送ったという感覚がどこか安心感と共感を覚える。自分は47回生、大先輩は17回生。この不思議な安心感は懇親会に移っても続いた。友人と連れ添うことなく一人で参加した自分だったので懇親会の席も自由選択だと、どこに座ろうか迷う。あたりをきょろきょろしながら、受付時に配られた名札を確認しながら無意識に黄色の名札の人を探して座ったのは、機械工学科卒の人たちが集まったテーブルだった。この郡山キャンパスで学んだ講義や実験をふまえ社会に旅立ち、またこうして戻ってきていることに日本大学工学部の歴史とつながりを覚えた。先輩方から恐縮にもお酌を受け、そしてお酌をする。そんなひとときが心地よかった。

今回は4年ぶりに開催となった母校を訪ねる会。コロナ禍でたいへんな中、主催してくださった関係者の方々へ深く深くお礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。（頂いた日大タンブラーでお茶を飲みながら原稿を記す）



母校を訪ねる会に参加して

『母校を訪ねる会』に出席して

高木 寛 (機械48回卒)

8月上旬、令和4年度『母校を訪ねる会』開催案内をいただき、大学時代の友人達に連絡を取ると同時に級友と過ごした郡山での4年間の大学生活を思い出しました。

私自身2010年開催の第30回『母校を訪ねる会』にも出席させていただき卒業後20年目2020年の『母校を訪ねる会』の開催を楽しみにしていましたがコロナ禍に伴い中止との事で開催を待ち望んでいました。当日は12年ぶりに校内を歩き新設の建屋、施設に目を奪われると共に当時から変わらない教室を友人達と訪れ着席し学生だった頃を懐かしみました。

大学時代は機械工学科に在籍し機械をつくるための基礎事項から応用まで学ぶことができました。

現在私が属する産業は100年に1度の大変革期を迎えています。

新型コロナウイルス感染拡大の影響や不安定な海外情勢等の複合的な要因により未来予測および要求技術予測が難しい環境の中にあります。3年次で学んだ機械設計演習Ⅱ歯車減・増速機設計の経験は現職の技術基盤となっています。また、当時の参考書である機械設計製図便覧第8版は現在でも常に手元に置き活用しています。

工学部のホームページを参照し昨今の学習体系を俯瞰することができました。外部環境/時代変化に即したコース体制など新しい教育形態が整っている印象をうけました。

当日は学生と交流させていただき学生の研究課題と自身の技術課題とをすり合わせることができ有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、このような機会を与えて下さった関係者の皆様に感謝申し上げます。

大学時代の仲間に会い暖かい時間を過ごせたことでこれからも前向きに仕事に取り組みそうです。

大学時代に培った知識と仲間との絆は確実に今の仕事に生きています。コロナ禍で開催が難しかったと思いますがこれからもぜひ続けてください。

母校の益々の発展と校友の皆様のご多幸を祈念致します。



母校を訪ねる会に参加して

野田 与 (工化47回卒)

去る10月29日(土)、日本大学工学部及び工学部校友会による「第39回母校を訪ねる会」に参加する機会を頂きました。元々3年前に会の案内を受けていたのですがその年の台風19号により北桜祭諸共中止、今年になって改めて開催の通知があったのでこの機会を逃すまいと参加に至りました。

卒業して20年以上の時を経て訪ねた郡山の町及び日大工学部キャンパスは変わるところは変わってすっかり浦島太郎状態になりましたがキャンパスに足を踏み入れてみると途端に昔日の記憶が徐々に蘇る感じがしました。ただ流石に同期生達とは卒業後連絡を取り合っていなかった為に工化47回卒では唯一人の参加となってしまうが逆に考えて普段接する機会のない異なる世代の校友との交流機会となったので決して無駄ではなかったと思います。また現地に参加できなかった同期生のメッセージが掲示されており彼らを含めた仲間達の動向が気になるようになったのは言うまでもありません。

最後に、このような形で同窓生と顔を合わす機会があれば極力参加できればと思います。

土木工学科二六会

長林 久夫 (土木19回卒)

昭和42年入学、昭和46年卒業の有志で始めた二六会も卒業50年を過ぎました。同期の卒業生は234名で、入学者も200名を超えていた。開始当初は3組(土木、建築の混成クラス)で開催されたクラス会が、母校を訪ねる会に合わせて次第に拡大して、現在に至っている。同期によるクラス会は二六会のほかに、名古屋、九州でも行われている。

10月29日、母校を訪ねる会の前夜には郡山ビューホテルアネックスにて二六会を開催した。参加者は22名で奥様を含めて24名であった。九州、鳥取、岡山、三重、岐阜、秋田、群馬などなど、遠方からの参加者の多さは工学部ならではのものと思う。懐かしい顔や、学生時代にはあまり面識はなかったが二六会で話をする友人も多い。

この年齢になると、これまでのお互いの無事を讃へあう会の側面も大きい。これまでの会の大きな集まりは卒業30年、卒業40年、卒業50年の他に、還暦の会、古希の会である。いずれも、30名から40名の参加者であり、卒業30年の会が最も多い参加者であった。年齢を重ねるにつれて、参加に困難を伴うのは仕方のないこと

母校を訪ねる会に参加して



である。今回も約100名に開催通知を送ったが、48名は体調不良やその他の理由で欠席であった。

このように、年月を経ても同級会を続けてこれたのは、偏に校友会と学部による母校を訪ねる会開催による卒業生の求心力を離さない企画によるところが多い。ご尽力に深く感謝致します。

次回は喜寿の会開催を期待する意見も多く、郡山在住の幹事の健康状態の如何に依存する。中には、ゴルフ付きの同級会を望む声もあるが、果たして何人が参加できるのか、今から楽しみである。



Before、After 「50年目の再会」

臼井 俊夫（機械20回卒）

コロナ禍の影響で実現出来なかった「母校を訪ねる会」が、今年度実施されることを「校友会報」で知ってから当日が来るのをずっと待っていた。

卒業後50年目で「訪ねる会」最後の対象である。この機会を逃したら、70歳を超えた旧友達には二度と会えないと思っていた。私自身2018年に脳梗塞を患い、左半身が麻痺したままである。連絡のつく友人達には積極的にハガキを書いて、参加を促した。

秋晴れの中、前日宿泊したホテルから早めに娘の運転する車で家内、孫と一緒に工学部へ向かった。10時の受付を待って62号館（愛称・ハット NE）1階ロビーに入った。1時間が過ぎた頃、私の携帯が鳴った。受付前に元気の良い爺さん2人（大河内富士夫君、岩田哲人君）が、手を上げて立っていた。髪の毛は少なくなり皺は増えたが、話しぶり心遣いなどその印象は昔とちっとも変わっていなかった。早速記念写真を撮り、工学部時代

の思い出や来たくても来られなかった旧友達の現況などの話に花が咲いた。

当日は「北桜祭」が開催されており、娘と孫達は、展示物や模擬店を見て回ったようである。娘はこの大学に入学した際、就職はどうなのかなど孫のために真剣に教職員の催すブースで話を聞いてきたそうである。孫達はグライダーやドリフトカーなどに興味を示していた。次世代に繋ぐ工学部生が出ることを切に願っている。

やがて記念撮影も終了し、学部長、校友会長などの話が終わりお弁当を食べながら、昔話の再開である。マグロの解体ショーも行われ、幸いにもマグロの重量をピッタリ当てることが出来、当選賞品もゲット出来た。

あっという間に3時間も過ぎた。来られなかった旧友を誘い再会する約束をし、本当に楽しい感激の一日を締めくくった。

母校を訪ねる会へ参加して

小野信太郎（土木29回卒）

本来であれば卒業後40年目で一昨年が対象の年であったが水害や新型コロナ騒ぎで4年間実施されなかった「第39回母校を訪ねる会」が実施されるとの連絡があったのが8月であった。

12年前の平成23年10月の卒業後30年目の「母校を訪ねる会」に参加した時は、早々に前夜の集まりの段取りの連絡を行ったが今回は躊躇していたらやはり、新型コロナの問題があり早々に行けないとの連絡などが数件あった。

そうこうしているなか、工学部校友会事務局から体育会射撃部OBの電気科29回卒三原尚氏が「母校を訪ねる会」へ出席するので射撃場の見学や射撃部の学生に会えないかとの連絡が射撃部顧問・監督の私のところにあった。早々にメールでのやり取りの結果、10月に私が福島県ライフル射撃競技国体監督として参加する宇都宮市での国体開催時期にわざわざ広島県の応援を兼ねて来るということでお会いする段取りを整え、お会いすることが出来「母校を訪ねる会」での再会を約束した。

当日は三原氏と再会し、学内を案内することが出来た。在学中はグラウンドの東端にあった射撃場も移設され、変わりように驚いていたようである。また、同じ高校から工学部へ進学したが学科が異なり在学中もあまり会う機会がなかった同級生菅野尋文氏とも40数年ぶりにあうことが出来た。こうしたこともやはりこの「母校を訪ねる会」があればこそである。

今回は70歳を迎える年か10年後かの再会を楽しみに、楽しい有意義な時間を過ごさせてもらいました。

母校を訪ねる会に参加して

40年ぶりに母校を訪問して

本田 和夫（工化30回卒）

卒業してから初めて母校を訪ねる会に参加させていただきました。40年ぶりに母校の校門をくぐり、過去の記憶が少しずつ蘇ってきました。しかしながら、記憶と現実のギャップはどうしても拭えません。一緒に参加した友達に聞くと、この40年間に東日本大震災や台風による浸水等の大きな災害に見舞われ大変だったということでした。しかし、それを微塵も感じられないほど、大変きれいに整備された校庭に、新しい校舎が建ち、素晴らしい環境になっていました。

私は、卒業後千葉県の中学校教員として38年間教鞭を執らせていただきました。仕事を始めた頃は、大学の頃の仲間と情報交換をしていましたが、月日が経過するとそれもなく、年賀状の交換程度になってしまいました。また、退職を目前に新型コロナウイルス感染症が流行し、卒業式は在校生と保護者だけで挙行し、修了式や離任式などは実施せずに寂しく学校現場を去ることになってしまいました。さらに、感染症の流行により、同僚だった人たちや友達との交流も減り、今まで普通にできていた多くのことができなくなることへの寂しさをひしひしと感じました。

そんな中、今年夏にやっと行動制限が解除されました。その後、母校を訪ねる会の案内が届き、最近も連絡を取り合っていた大学時代の友人と相談をして参加させていただくことにしました。懇親会では、40年ぶりに会った友人と昔話に花を咲かせ、会場に居合わせた懐かしい同窓とも話をすることができ、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。

次の日は、一人でレンタカーを借り、下宿や下宿の食事が無いときに行った食堂を探しに行ってみました。記憶をたどりながら、あったであろう地域をふらつきましたが、ついに見つけることができませんでした。さすがに40年の歳月か、年齢によるぼけかは定かではありませんが、記憶を薄れさせてしまったようです。

この2日間とても有意義な時間を過ごさせて戴きました。それも、今回の母校を訪ねる会開催に尽力された日本大学工学部の先生方や職員の皆さん、校友会の皆さんのおかげと深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



「母校を訪ねる会」に参加して

笠井 智行（建築40回卒）

この度、「母校を訪ねる会」のご案内をいただき、当時の卒業研究室の仲間たちと一緒に、卒業以来30年振りに母校を訪問させていただきました。

8月に仲間から一通のメールが…「案内が来たよ！集まるかい？」「何それ？うちには来てないよ」「うちらが卒業して30年か…」「みんな誘って参加しようか」みたいな感じで「母校を訪ねる会」参加計画が始まり、みんなと何回かメールのやり取りをしました。コロナ禍ということもあり、参加を見送った仲間たちも居りましたが、今回5名で参加することになりました。

前日の午後、わくわくドキドキしながら、新潟（長岡）から車で一路郡山を目指しました。今や全線開通した磐越自動車道も、30年前は猪苗代磐梯高原IC～郡山IC間が開通したばかりの時代でしたので、懐かしい国道49号線で行くことにしました。阿賀野川沿いをひた走り、紅葉で色づいた木々の中、懐かしい風景を満喫しながら向かいました。

夕方、郡山駅周辺に到着すると、すっかり都会的な雰囲気になった郡山駅に、ここは本当に郡山？って感じを受けました。夜はお楽しみの長澤研究室「同窓会」。コロナ禍だったので、約3年振りに仲間たちと再会。夜が更けるまで酒を酌み交わし、昔話に花が咲きました。

当日は晴天に恵まれました。工学部に向かう道中、懐かしい街の風景が次々と。工学部のキャンパスは、本館をはじめ、62号館（ハットNE）、70号館（教室棟）などが建築され、すっかり生まれ変わっており、30年という時の長さを感じました。

中庭にて記念撮影を行った後、62号館（ハットNE）にて懇親会が開催され、「生本まぐろ解体ショー」のアトラクションなどで会場は大いに盛り上がりました。懇親会も終わり、仲間たちと学内を散策しながら、大学周辺を360°見渡せる70号館の「展望フロア」を見学。第72回北桜祭の開催期間でもあり、学内のあちこちで在学生たちの活気溢れる様子も拝見することができました。

今回、初めて「母校を訪ねる会」に参加させていただきましたが、大学関係者、校友会役員の皆様方のご配慮のおかげで、仲間たちと楽しいひと時を過ごすことがで

母校を訪ねる会に参加して

きました。

10年後の「母校を訪ねる会」には、さらに多くの仲間たちと参加したいと思います。



我が青春を捧げたボート部が～！

叶内庄一郎（機械40回卒）

卒業してから30年、初めて「母校を訪ねる会」に参加しました。郡山駅で新幹線を降り、東北本線安積永盛駅で下車し徒歩で母校に向かいました。当時と比べ街並みはずいぶん変わっていたものの、いざその地に立ってみると入学から卒業までの様々な思い出が鮮明に蘇りました。

正門からキャンパスに入ると、北桜祭の出店が立ち並び、体育館脇の広場ではイベントが開催され、生徒たちは4年ぶりのリアル北桜祭を元気に楽しんで盛り上げていました。ずいぶん歳を取ったせいか少し幼くも感じた生徒たちに対し、30年前とは比べものにならないスピードで変化していく社会を、一歩ずつ前に進み社会に貢献する立派な社会人に成長してほしいと思いました。

さらに足を進め、受付の62号館（ハットNE）に着くとすでに多くの先輩方がいらしており、少し緊張しながら自分も受付をしました。受付は同期生の佐久間啓くんが対応してくれました。第40回卒業の同期生は15名の参加でした。佐久間くんとは当時あまり接点がありませんでしたが、それでも記念撮影やキャンパスの散策、食事会で共通の友人の話をしたり、当時の出来事を話しているだけで本当に楽しい時間を過ごすことができました。ただひとつ残念だったのは、我が青春を捧げた「ボート部」が無くなっていたことでした。仲間とすごした時間は一生の宝で、卒業後苦しい時も当時を思い出し頑張ることができました。後輩を激励に部室に寄ったのですが遅すぎたようです。

卒業し時間が過ぎ、先生や同輩の記憶も薄れて、「今さら母校を訪ねても……」と思いましたが、いざ母校を訪ねてみると不思議と記憶が蘇り、貴重な時間を過ごすことができました。今回参加できなかった40回卒業の皆さん！ボート部のみんな！次回の「母校を訪ねる会」はぜひ参加して、郡山の、母校の発展に驚きつつ、昔話に花を咲かせましょう！

最後になりますが、今回の準備をしていただいた校友会役員の皆様方に改めて御礼申し上げます。

日大に感謝

小野 徳正（電気40回卒）

私の人生で一番多くの友人が出来たのは日大時代であり、今後も塗り替えられることはないでしょう。そんな日大には感謝の気持ちでいっぱいです。

今回は1学年上と同時開催ということで、下宿仲間との忘年会メンバーに誘ってみたところ、検討はして頂いたのですが途中で都合が悪くなり、私だけの単独参加となりました。

安積永盛駅から歩いて阿武隈川を渡っていると、日大時代にタイムスリップしたような感じになり、自然に日大時代の思い出が蘇ってきました。

私の下宿ではヨット部の先輩が多く、その影響で私もヨット部に入部しました。猪苗代湖の真ん中でヨットの上から見た磐梯山の景色は最高でした。日々の生活では、日中はクラスの仲間、放課後はクラブの仲間、夜は下宿の仲間と一緒に、寝ている時以外は常に友人が周囲にいて、とても楽しい生活でした。上下関係が厳しい面もありましたが、目上の方への話し方や挨拶や（今となっては間違いだらけの）お酒の教育が身に付き、社会人になってとても役に立っています。思い出を1つ挙げると、下宿内で年に1回焼肉パーティーがあり、細長い通路に2列になって向かい合いながら座って開催されました。トイレに行くには狭い通路を多くの先輩に体をよけて頂きながら進みますが、その都度先輩によるお酒の関所を通行しなければなりません。行きも帰りも一気飲みの連続で大変でしたが、今では笑い話として思い出に残っています。

卒業後もいろいろとご縁がありました。入社して新潟に配属になりましたが、そこでは1学年上の電気工学科の方と同じ部署と一緒に仕事をしていました。その後転職して実家（東京）に戻り婚活をしていましたが、結婚相談所で紹介された方が学生時代にアルバイトをしていた「びっくりドンキー富久山店」の近所の方で、デートの時はアルバイト時代に利用していた駐車場で待ち合わせをして出会っていました。今は結婚して私の実家に住んでいます。郡山とのご縁は生涯続くことでしょう。

最後になりますが、母校を訪ねる会に参加させて頂き、ありがとうございました。校友会関係者の皆様方に心より感謝を申し上げます。



母校を訪ねる会に参加して

令和4年度「母校を訪ねる会」に参加して

手塚 公裕（土木49回卒）

令和4年の夏、「母校を訪ねる会」の案内が届き、卒業して20年が経ったことを改めて実感しました。節目の年に初心を思い出す良い機会をいただき大変感謝しております。

平成9年4月、土木工学科に入学し、大学院博士後期課程修了までの9年間で工学部でお世話になりました。合気道部OBの父との約束で、名称に「道」の入った部活を探していたところ、空手道部に魅力を感じ、初心者でしたが入部しました。苦しいこともありましたが、大学の4年間、月曜日から土曜日まで稽古に励んでいたことは、今では良い思い出となっています。大学4年生になってからは衛生工学研究室に6年間所属しました。中村玄正先生と佐藤洋一先生の下で理想の水環境を目指した研究を進め、研究者としての基本やその他にも色々なことを教えていただきました。また、空手道部では五郎丸英博先生、大学院では専門分野の近い高橋迪夫先生、長林久夫先生、藤田豊先生にご指導いただきました。空手道部と衛生工学研究室で送った日々が現在の私の基礎となっており、その時からの友人・先輩・後輩が今では大切な仲間となっています。

大学院修了後、建設コンサルタント、環境計量事業所、佐賀大学（研究員）と転々としてきましたが、縁あって母校で教壇に立つようになってから約10年が経ちました。最初の2年間は、長林久夫先生の下で大学教員としてのイロハを教えていただきました。特に、教育者としての在り方、教育と研究を両立することの大切さを学びました。長林先生が定年退職された後は、水環境システム研究室を引き継ぎ、子供から高齢者まで誰もが親しめる水環境を目指した研究に取り組んでいます。

最近では、白河市の南湖公園と工学部近傍にある古川池に関する研究に力を入れています。南湖は200年以上の歴史のある公園にあり、国の史跡名勝に指定されていますが、水質悪化や生物多様性の低下が課題となっています。その対策として、8年前から白河市と共同研究を進め、南湖の価値を後世に残す水環境管理方法を検討し



ています。一方、古川池は学内を流れる徳定川が流入する三日月湖（阿武隈川旧河道）で、遊水池としての機能を有しています。古川池では20年ほど前に策定された親水公園計画が進んでおらず、その後の2011年東日本大震災や2019年東日本台風（台風19号）といった大災害によって状況が大きく変化しました。そこで、地域住民で組織されている古川池愛護会の方々と相談し、現状に適した計画を立て直して実行することを目標とし、2021年に「古川池の持続可能な防災親水公園化プロジェクト（通称:ロハスの池PJ）」を立ち上げました。土木工学科教員9名と学外協力者として古川池愛護会の高橋晋也会長（理工学部OB）、畠良一事務局長（工学部OB）、山根悟事務局担当、そしてオリジナル設計株式会社の牧乃瀬統博士（工学部OB）にも参加していただいています。

校友の皆様には、研究のみではなく学生の就職に関しても毎年ご協力いただいています。また、校友の高校教員の皆様には、本学の魅力を積極的に広めていただけており、その結果として多くの学生達が入学してくれています。さらに、私が指導教員を務めている空手道部、日本拳法部、書道会では、校友の方々が技術的な指導を下さっており、学生達にとって良い学びとなっています。

父が校友会の活動をしていたため、学生の頃から社会で活躍されている先輩方とお会いする機会に恵まれ、多くの事を学ばせていただきました。現在も、様々な面で、校友の皆様、そして校友会によって工学部が支えられていることを実感し、大変感謝しております。私も校友の1人として、日本大学、特に工学部に貢献できるよう精進して参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

最後に、このような貴重な機会を下さった工学部校友会並びに関係者各位に感謝申し上げます。



母校を訪ねる会に参加して



人とのつながりとマンモス大学のパワーに育まれたキャリア

杉山 克浩（電気49回卒）

2001年に電気電子工学科を卒業しました。

母校を訪ねる会は卒業10周年の前回に続いて2回目になります。前回の参加時は近所的美容院のおばちゃんや郡山で就職した先輩、研究室に残った同級生、先生方などとの懐かしい再会がありました。

今回も驚きの嬉しい再会がありました。大学時代、遊びすぎて留年した私は、忙しいことで有名だった尾股定夫教授の研究室に放り込まれました。ついていくのに苦労はしましたが、当時最先端の研究に少しでも関われるのが楽しくて研究室に入り浸るようになると、頑張りが認められ、就職先として教授の同級生が経営する東京の会社を紹介されました。卒業し、紹介された会社に入ると、教授の工学部時代の同級生だった社長と、同じく同級生の部長の元、卒研の副産物として勉強したプログラミングの知識を生かしてソフトウェア開発に携わりました。その後、昔からの知人の誘いで転職しましたが、元の会社で既に受けていた仕事を断らず、元の下請けの扱いにしてもらって最後まで仕事をやり切ることで円満に転職できました。

新しい会社で客先常駐の勤務だった際に客先から誘いを受けて転職し、10年勤めた後、さらに別の会社からの誘いで転職して現在に至ります。なんと、今の会社の社長も工学部の機械科を卒業された方です。

これまでの転職歴はほとんどが知人や顧客からの紹介によるものです。個人的にはあまり世渡りが上手いとは言い難いですが、自分の役割をしっかりと果たしていれば、どこかにそれを評価してくれる人がいる、もちろん運の良し悪しもあるものの、世の中意外と捨てたもんじゃないと思っています。

今回はコロナ禍の影響で本来は一緒にならないはずの年の方とも一緒になり、懐かしい尾股教授や社長、部長と再会できました。

関係者の皆様、楽しい会をありがとうございました。

母校を訪ねる会参加の感想及び、現在の仕事状況について

栗城 雄平（土木60回卒）

この度、日本大学工学部土木工学科第60回卒業生として令和4年度第39回母校を訪ねる会に参加させて頂きまして、大変光栄であり、コロナ禍等で4年ぶりとなる母校を訪ねる会開催に関して誠に嬉しく思います。私は、学生時代、第55・56代應援團團長を務めておりまして母校を訪ねる会では毎年演武を披露させて頂いたのを思い出します。同團長当時は、団員が15名おり、校友会、應援團OBの諸先輩方にご指導を頂きまして活動を行っていました。今回、団長が校歌を披露させて頂きましたが、コロナ禍での開催ということもあり、エール等ができない状況で、少し寂しい気持ちと現在団員が1名ということもあり、精一杯頑張っている現團長の姿を見て私自身も元気をもらいました。少しでも多くの学生に應援團の素晴らしさが伝わればと思うと共に是非、一人でも多くの学生に應援團に入団してもらえればと思います。

現在、栃木県にある法務省管轄の施設等機関であり、矯正施設である喜連川少年院で勤務しています。ここでは罪を犯してしまった少年の健全育成を期し、非行のある少年に対する矯正教育及び帰住先や進路を決めるための支援を行っており、体育の授業などでは少年と共に汗を流すこともあります。法務教官は、自身の非行について自分自身と向き合わせ、将来の生活設計を考えさせることで更生に向かわせるなど、とてもやりがいがあり、私たちが良き大人のモデルとして存在することが非常に大切なことだと思っています。

少年院で行われる矯正教育には教科指導、職業指導などがあります。喜連川少年院の教科指導には、県立宇都宮高等学校通信制喜連川教場や、高等学校卒業程度認定試験の合格を目指すことを目的としたコースがあります。また、職業指導には、少年たちが栽培した野菜や陶芸指導で作成した陶芸品を、「道の駅きつねがわ」に卸す取組があります。こうした取組を通じて、少年たちが作り出したものが、これまで迷惑をかけていた地域の人たちの役に立ち、自分たちの製品が販売されることで社会への貢献やつながりを感じさせることにもつながっていきます。

学生の皆様には、非行少年を教育する法務教官という職を知っていただき、挑戦していただけたら幸いです。

最後に、母校を訪ねる会に参加させて頂き、学生時代にお世話になった諸先輩方とお会いし、懐かしい気持ちと今後もお世話になった日本大学工学部に少しでも恩返しできるようにしていきたいと思っています。



支部活動報告

最寄りの支部へお問合せ下さい!!

関東支部

神奈川県横浜市港北区綱島上町1-1-4-822
☎045-546-2647



●支部長

小林 啓一
(土木 20 回卒)

関東支部

支部長
小林 啓一
(土木 20)

事務局長
津島 幸久
(機械 38)

東京都 校友会

会 長 山本 健史 (建築 37)
事務局長 松崎 信一 (建築 29)

千葉県 校友会

会 長 藍郷黎治郎 (土木 14)
事務局長 松尾 清志 (土木 29)

神奈川県 校友会

会 長 本田 貢 (土木 21)
事務局長 早川 辰也 (土木 29)

栃木県 校友会

会 長 星野 光利 (土木 33)
事務局長 篠崎 淳 (土木 36)

群馬県 校友会

連絡責任者 福井 清 (土木 14)

埼玉県 校友会

会 長 永田正一郎 (土木 21)
事務局長 城座 隆夫 (機械 21)

茨城県 校友会

連絡責任者 穴戸 薫 (土木 13)

山梨県 校友会

連絡責任者 正木 徳栄 (土木 47)

長野県 校友会

会 長 田中 敏雄 (土木 18)
事務局長 酒井 洋 (土木 31)

関東支部の組織は、関東支部の下に 1 都 8 県（東京都、千葉県、神奈川県、栃木県、群馬県、埼玉県、茨城県、山梨県、長野県）の校友会で構成されております。

●コロナ禍でやったこと

10 月に 3 年間中止していた関東支部総会を開催。コロナ禍であるため、1 都 8 県校友会からの参加人数を制限し、工学部校友会本部より中野会長を招待して、各校友会間の懇親を図りました。また、12 月には神奈川県校友会役員会を開催しました。

●次年度への抱負

関東支部は毎年 6 月に関東支部総会を開催。都県校友会は定期的に役員会、総会を開催しております。コロナが終息いたしましたら、校友の絆を深めるために各行事を再開してまいりますので、校友の参加をお願い致します。



神奈川県校友会役員会



支部総会

東東海支部

静岡県焼津市本中根485-5
☎080-1626-6412



●支部長

酒井 浩行 (土木 36 回卒)

●支会構成

東部支会 中部支会 西部支会

●コロナ禍でやったこと

インターンシップ・企業説明会(8月)

参加学生・父母 48名
企業・官公庁(県市) 29名
校友会役員(支部) 18名 計95名

高校生対象進学説明会『工学部IN静岡』

島田工業高校で開催

OB校友高校教員、校友企業官公庁より12名
生徒保護者52名 参加

●次年度への抱負

- ・総会(東部・中部・西部支会の持ち回りで開催)
- ・インターンシップ、企業説明会
8月に県内企業、県庁、市役所校友の参加を得て、学生に対して実施
- ・常任幹事会
年間3~4回開催。幹事(25名)の出席を得て、情報交換、行事立案を実施しています。



●地域でのトピック

- ・藤原正臣氏(土木6回) 東東海支部名誉顧問
地方自治功労 瑞宝双光章 受章

工学部土木工学科卒業後、静岡県庁に奉職。土木行政一途に、都市住宅部技監を経て、浜松土木事務所長(本庁部長級)にて定年退職。静岡県土木行政のリーダーとして活躍され、母校日本大学校友として、県庁土木は日大土木の基盤をつくられ、母校の名声を高らしていただきました。さらに、工学部校友会活動の県内の第一人者として、東東海支部(静岡アカシア会)の設立と若手の育成に大きな貢献をされました。母校(郡山)の地から遠く離れた地域にもかかわらず、県内各方面では活躍されている工学部校友の鏡であり、尊敬される第一人者であります。



東海支部

愛知県名古屋市中区栄4-6-25
川北電気工業(株)内 ☎052-251-7111



- **支部長**
近藤 直幸 (土木 28 回卒)
- **担当エリア**
・愛知県 ・岐阜県 ・三重県

● コロナ禍でやったこと

3年ぶりに、恐る恐る忘年会を開催しました。参加者全員大喜びで昔話を花を咲かせました。ただ、参加者が年配ばかりとなり今後の支部の運営を危惧した次第です。参加者は22名でした。

● 次年度への抱負

なんとか来年度は、総会を開催したいと思っておりますが、心配です。

北陸支部

新潟県新潟市秋葉区秋葉1-21-6
☎0250-24-8048



- **支部長**
小川 邦之 (電気 30 回卒)
- **コロナ禍でやったこと**
3年ぶりに各種会合・イベントを再開

- 4/23 令和4年度「工学部校友会通常総会」の出席(小川新支部長)
- 6/3 役員会にて、総会・懇親会の開催及びゴルフコンペの再開を申し合わせ
又会費徴収も一口4,000円から3,000円として再開
- 7/9 校友会新潟桜門会 総会出席(新潟グランドホテル 山本久常顧問、田邊篤幹事)



定時総会・懇親会



懇親ゴルフコンペ

- 7/23 工学部校友会北陸支部 第20回定時総会・懇親会の開催(新潟東映ホテル) 懇親会参加者21名
日本大学工学部校友会 中野会長、アカシア教育研究会 久保田幸正新潟県支部長 出席
コロナ禍の影響もあり参加者数は少なかったが、再開したことで次年度につながると思われる
 - 10/1 校友会北陸支部 懇親ゴルフコンペ開催(新津カントリークラブ) 9名参加
 - 10/30 令和4年度「第39回母校を訪ねる会」の出席(小川新支部長)
 - 11/17 校友会新潟桜門会 役員会出席(新潟グランドホテル 田邊幹事、小林一成会計出席)
- ※役員会(忘年会)はコロナの関係により見送り。

● 次年度への抱負

今年度に引き続き、以下の各種会合・イベントを開催・出席の予定

1. 校友会本部等の交流
 - ①定時総会(懇親会)
 - ②工学部校友会通常総会
 - ③母校を訪ねる会
 - ④桜門会新潟県支部各種会合
2. 北陸支部の会合・懇親会等
 - ①役員会(定時総会打ち合わせ、会計報告)及び懇親会
 - ②懇親ゴルフコンペの開催



九州支部

福岡県福岡市博多区板付4-6-33
株北洋建設内 ☎092-589-0151



- **役員**
支部長 上田 勝(土木28)
副支部長 上村公仁隆(建築28)
事務局長 脇山 亨治(建築29)
会計 後藤 久幸(機械32)

- **支部長**
上田 勝
(土木 28 回卒)

- **コロナ禍でやったこと**
昨年もコロナ禍で動き辛い1年でしたが、11月11日に3年ぶりの支部総会を開催することができました。中野会長にもおいで頂き久しぶりに大人数の集まりを行うことができました。

「やっぱ大勢で飲む酒はうまいばい！」という感じであつという間の時間でした。個人的には母校を訪ねる会に参加させて頂き数十年ぶりの同級生とも会うことがで



支部総会

きたのは大変うれしかったです。

● 次年度への抱負

次年度につきまして、支部総会を開催することはもちろんですが、月に1度(第三木曜日)のアカシア会も楽しく開催していこうと考えています。「コロナはやっぱアルコール消毒が一番ですたい！」

北海道支部

北海道札幌市豊平区美園11条5-2-9
(株)横関工業内 ☎011-831-6851



●支部長

横関 一伸 (建築 25 回卒)

●コロナ禍でやったこと

新型コロナウイルスの影響で活動しようにも思うように出来なかった。

●次年度への抱負

5月頃に、新型コロナウイルスが2類から5類に変更されたら、皆様の健康状態などをお聞きして支部総会の案内を出し、総会を開催したい。



四国支部

香川県さぬき市志度1178-4
☎087-894-1040



●支部長

六車 秀世
(土木 16 回卒)

●役員

支部長 六車 秀世 (土木16)

※香川支会 支部長兼任

愛媛支会 久保 陽生 (土木34)

徳島支会 藤原 賢治 (建築36)

高知支会 東條 傑 (機械25)

事務局長 松岡 慎哉 (建築37)

●コロナ禍でやったこと

主な活動

4月 2日(土) 香川支会 (14名参加)

8月27日(土) 四国支部総会 (16名参加)

11月12日(土) 愛媛支会 (14名参加)

一木会 (於：香川県高松市) 12 回
開催※四国への出張者・新人の方
大いに歓迎致します。

●次年度への抱負

四国支部総会 8月下旬～9月上旬頃

・香川支会 花見会 3月下旬～4月上旬頃

・愛媛支会 鵜飼見学会

6月1日～9月20日の期間

支会 11月11日(土)の予定

・徳島支会 11月初旬頃



支部総会

教員部会

静岡県焼津市本中根485-5
☎080-1626-6412



●支部長

久保田幸正
(建築 19 回卒)

●支部構成

・北海道支部 ・青森支部

・山形支部 ・福島支部

・静岡支部

・新潟支部 (長野県・群馬県含む)

・茨城支部設立準備中

●役員名簿

支部長 久保田幸正 (建築19)

支部長代行 横尾 聡 (建築28)

相談役 関根 敬次 (建築16)

事務局長 永田 進 (建築22)

事務局次長 阿部 英敏 (工化33)

常任幹事

久保田幸正 (建築19) 渡邊 秀雄 (機械20)

大澤 俊幸 (土木27) 豊島 隆幸 (電気27)

田村 浩啓 (土木29) 伊藤 満 (建築30)

宮崎 拓也 (土木49) 田畑 剛 (建築52)

小林 邦之 (電電52) 大石 祐太 (建築61)

紅林 達哉 (建築62) 千葉 健寛 (建築65)

安彦 宗哲 (機械65) 中山 智博 (土木66)

吉村 恵太 (電電66) 山本 陽介 (電電67)

●コロナ禍でやったこと

・日大工学部ミニオープンキャンパス In 静岡

(於：静岡県立島田工業高等学校)

生徒、保護者など多数出席

校友教員・校友官公庁、民間企業 13 名

担当：大石 祐太 (建築 61 回卒)

・校友教員意見交換会

(7月30日(土) 日大工学部オープンキャンパス)

学部主催であるが全国の校友教員に声を掛けて参加

●次年度への抱負

・教育課程特別講義

25 年以上前から教職教室主催のもとで校友教員が講演を行なっている。現職教員もまた、先輩からの話ということで強いインパクトがあり、この良き講座は今後共教員部会としても全面的に協力しバックアップしていきたい。

●地域でのトピック

・荒川 俊一氏 (機械 35 回卒)

福島県立勿来工高より工学部機械工学科・大学院工学科修了。在学中は首席優等生として勉学に励み、高等教員の道へ進む。令和4年4月1日付で母校の勿来工高に校長として着任、母校と地域に大きな期待を受け高校教育(工業)と母校の為に全力投球されている。



校友会より

寄付者ご芳名

以下の個人・団体様より寄付金を賜りました。
心より御礼申し上げます。(五十音順)

あかしや建友会 様
川辺 和洋 様 (機14)
佐々木 巖 様 (機9)
電気工学科第30回卒同級会 様



校友会賞受賞者

以下の5名に令和3年度校友会賞の授与を行いました。(敬称略)

奥田 真翔 (電電) 体育会 第52代委員長
須永 圭佑 (電電) 学術文化サークル連合会 第48代委員長
大野 雅浩 (生命) 北桜祭実行委員会 令和2年度委員長
角本 佳駿 (建築) 應援團 第65代團長
南部 光亮 (情報) NU 祭実行員会 令和2年度及び3年度委員長

あかしや建友会

あかしや建友会から校友会に寄付

令和4年10月30日(日)「あかしや建友会」(会長:浦憲親 建築18回、
会員30数名)から、会を閉じるにあたり、長年にわたる校友会のご
支援に感謝の意を込めて寄付(32,578円)をさせていただきました。

本会は、1993(平成5)年、故福地利夫教授のご提案に基づき、
工学部建築材料研究室(5研究室:幸田太一先生、福地利夫先生、
小栗治男先生、橋本寛先生、渡澤正典先生)のOB・関係者が集う
会として設立されました。1994年の第1回から2022年の約30年
間で21回の会合を開催してきました。会は講演会が主体で、広く一般の方々の参加を募り、約500名が聴講しています。

30年間の長きにわたり本会の活動が継続できましたことは、偏に、ご支援頂いた校友会のお陰と感謝致しております。
また、ご多忙の中、参加頂いた方々、本会の主旨に賛同いただきご講演いただいた方々、開催準備にご尽力いただいた
多くの方々にこの場をお借りして、御礼申し上げます。誠に有り難うございました。 【文責:柳 啓(建築19回卒)】



あかしや建友会納会、工学部本館3階会議室

OBより

日本拳法部OB 早乙女道宜(電気45回卒)

新型コロナウイルスによる影響で大変な状況ではございますが、ここで日本拳法
部の近況をご報告させていただきます。

去る、2022年12月4日に日本大学松戸歯学部体育館にて、第10回日本大学
日本拳法大会が行われました。各学部日本拳法部があることから始まった大会も
早いもので第10回を数えるまでになりました。

今回、試合には、法学部や経済学部、文理学部などを中心とした「本部」、
「松戸歯学部」、「生産工学部」、そして我が「工学部」の4学部が出場しました。毎年、「歯
学部」「国際関係学部」も参加していますが、今年は残念ながら欠場となりました。

この試合の形式は試合経験数を多くしたいとの意向で、7人制のリーグ戦で行われています。ただ、工学部は部員不
足ということもあり、今回は本部との混合チームで出場しました。結果は1・2年生中心のチームということもあり、残念
ながら工学部は良い成績を残すことはできませんでした。出場した工学部の学生は試合に負けて悔しがっていましたが、
試合の後の合同練習で各学部のOBから指導を受けたり、他学部と交流を深めたりとプラスになったことが多かったと思
います。

試合の敗因は、やはり経験不足と言いたところですが、一番の敗因は部員が少ないための練習不足です。今後は単独で
出場できるように数多くの学生が入部し、この試合だけではなく、東日本の大会や福島県大会にも出場していきたいと思
います。

また、OB・OG会の活動としては、2022年度は創部55年の節目の年でもあり、本来なら「創部55周年記念式典」
を行い、OB・OGの方とお会いできるはずでしたが、コロナ禍ということもあり式典は行われませんでした。今後、この
状況が一日も早く解消され、平穏な日々を取り戻せるようになった際は、皆様と会う機会があると信じています。

最後に、学生達は昔と変わらず、「好きで入った拳法の道」と思い、いつでも道場で先輩方がいらっしゃるのを待ってい
ます。「嫌な先輩感」を出さずに日本拳法部道場にお越し頂きたく思います。

以上、誠に簡単ではありますが、私からの日本拳法部の近況報告とさせていただきます。

日本大学工学部が推進する産学官連携活動 その6

健全で持続可能な 社会インフラの実現を目指して ～地域のインフラはみんなで守る～



日本大学工学部
工学研究所長兼ロハス工学センター長
土木工学科 教授 岩城 一郎

はじめに

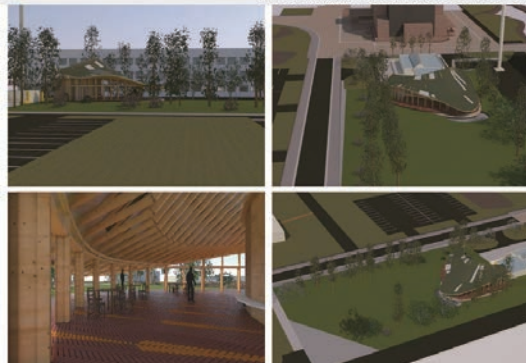
校友の皆様、本年もよろしくお願いいたします。昨年の本報では、「ロハス工学のこれまでとこれから」と題し、ロハス工学の変遷についてまとめてみました。このような整理をすることで改めてロハス工学の幅広さと奥深さを実感することができました。本報では前段にロハスの家群跡地再生プロジェクトの近況についてご報告するとともに、後段では2012年以降、ロハス工学の一環として当研究室で進めてきた健全で持続可能なインフラの実現を目指した取り組みについてご紹介します。

ロハスの家群跡地再生プロジェクトの近況報告

2022年度もロハス工学に関する様々な取り組みを進めてまいりました。その中核にあるのが2019年の東日本台風で被災し解体を余儀なくされたロハスの家群の跡地に整備される（仮称）ロハス工学センター棟であることに論を俟ちません。昨年の本報で報告したロハス工学センターのグランドデザインに基づき、2022年度は基本計画・設計の見直しから実施設計（浦部智義研究室＋はりゅうウッドスタジオ）を進め、2023年1月から本格的な着工を迎えることになりました。本プロジェクトはロードマップに示す通り、長期的なロハスのキャンパス構想の一環と位置付け、その拠点形成を目指したものです。特に、基本設計段階において、屋根の形状を見直し、巨大な帽子のつば（サンバイザー）のような形状とすることで、より豊かな軒下空間をつくり環境装置としての役割を持たせるほか、屋上の雨水を効率よく集水し、レインガーデンを介して、エリア全体でその水の利用を考えています。このような自由度の高い建築デザインの実現には、建築設計時にプログラミングの様な工程が必須になりますが、それに本学大学院生

完成予想パース

日本大学工学部浦部智義研究室＋はりゅうウッドスタジオ



（仮称）ロハス工学センター棟の完成予想パース

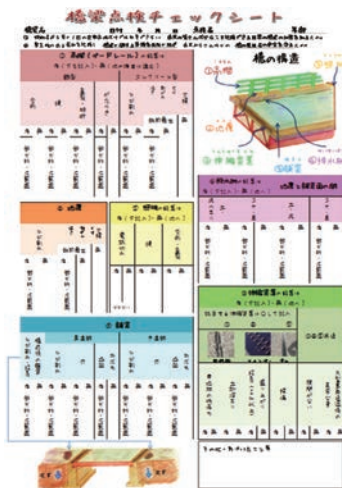
（浦部研究室）が大きく貢献しています。県産材をふんだんに利用した構法でつくる建築空間は、本年6月に竣工予定ですので、そのタイミングに合わせ、内覧会を実施するとともに、8月のオープンキャンパスではまさにロハス工学の新しい拠点として高校生や保護者の方々にお披露目したいと考えています。さらに、それ以降はこの施設に実装するロハスの技術の選定に取り掛かります。そのため、県内外から幅広くロハス工学の概念に合致した技術を集積し、これらの技術の実装と検証を進めていきたいと考えています。ロハス工学センターの先にはロハスのキャンパス計画、さらには、「ロハス工学」から「ロハス学」への展開があり、夢が尽きることはありません。校友の皆様方には、引き続き、忌憚のないご意見をお寄せいただきたく存じます。

地方インフラの現状と課題

2022年12月2日で笹子トンネル天井板落下事故から10年を迎えました。この事故を契機に、政府は2013年をメンテナンス元年と位置付け、インフラの長寿命化を国の重点施策としました。さらに、国土交通省では2014年に全国に約70万ある橋に対し、国が定める統一的な基準により、5年に1回、近接目視点検を行うことを基本とする省令を制定しました。

橋のメンテナンスに関する問題は地方の市町村ほど深刻とされています。その理由は道路橋の約7割が市区町村で管理されており、こうした自治体では概して予算や技術力が不足しているためです。国土交通省によると、高度経済成長期に完成するなど建設から50年以上経過した橋は今年度、34%に上り、10年後に59%まで急増するとしています。そのため、基幹道路やそこに架かる大きな橋など、重要なインフラは行政が守っていく必要がありますが、地域にあるすべての道路インフラを守ることは難しい現状にあります。老朽インフラのトリアージ、すなわちどの橋からどのようにメンテナンスをしていくかという優先順位付けが今後ますます必要になります。結果、すべてを自治体任せとするには限界がありますので、著者の研究室において、住民との協働による橋のセルフメンテナンスという方法を考えました。以下にその内容をご紹介します。





簡易橋梁点検チェックシート（おもて面）



橋マップの例

橋のセルフメンテナンスの構築と実装

まず、学生の卒業研究の一環として、住民でも橋の日常点検が可能なチェックシートを作成しました。このシートはA4両面のカラー刷りで、おもて面がチェックシートになっています。橋は水により直接的・間接的に劣化することがわかっているため、橋に水が溜まりやすい状況になっていないかを確認できるよう、

排水柵の詰まりや土砂の堆積などをチェック項目に挙げました。また、住民の安全に配慮し、歩道や路肩から点検可能な部位に絞り、住民が親しみを持って取り組めるよう、色使いやフォントにも配慮しました。一方、うら面には橋の部位や損傷のカatalogを示すとともに、橋に異常が見つかった際の通報システム（橋の119番）や、点検を行う際の安全上の注意事項も記載

しています。このシートを以前から学生と住民との協働による道づくりなどで連携している福島県平田村において、村民に配布したところ、多くの方に近所の橋の点検を行っていただきました。続いて、回収した点検結果を研究室で分析するため、橋の各部位の劣化や土砂の堆積状況などを数値化し、10段階で評価を行い、点数の高いものを赤で、点数の低いものは青で5色に色分けし、電子地図上に表したところ、どこに予防保全の必要な橋があるかを一目で把握できるようになりました。これを「橋マップ」と呼んで住民に公表したところ、住民自らが週末に橋の上の堆積土砂や排水柵を清掃する「橋の歯磨き活動」へと進展しました。現在平田村ではチェックシートによる橋の簡易点検→橋マップによる見える化→橋の歯磨き活動というセルフメンテナンスサイクルが回り始め、村で管理する約60の橋

では、土砂のたまったものがほとんど見当たらない状態になりました。このような取り組みは他地域にも浸透し、例えば宮城県にある黒川高等学校では課外授業の一環として生徒が地域の橋を点検し、予防保全の必要な橋に対し歯磨き活動を行っており、その範囲は黒川郡の4市町村に及んでいます。このような取り組みは2022年12月現在、全国約30市区町村に広がり、住民や学生のみならず、自治体の職員や地元企業にまで浸透しつつあります。

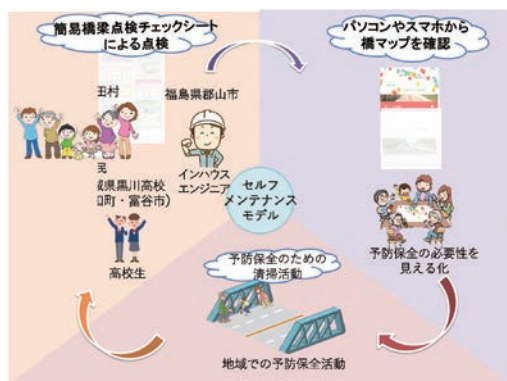
このような活動を進めるねらいは2つあります。一つは住民が主体となり、橋の劣化の原因である水に着目した橋の簡易な予防保全を行うことで橋の長持ちにつなげようというものです。もう一つはこれまで身近なインフラはあって当たり前で無関心だった住民のインフラに対する感情を、関心そして愛着につなげることにあります。実際、平田村の住民や黒川高校の高校生たちはインフラに対する向き合い方が明らかに変わり、日ごろから地域のインフラに気をかけてくれるようになりました。これらの活動の詳細は[<http://bridge-maintenance.net/>]に記載されていますので、ご参照ください。

自立した地域づくりを目指して

地域のインフラは住民の生活を支えるまさに基盤であり、これが廃れては地方創生など成り立つはずもありません。一方、地域には都会にはない強み、「地域力」があります。役場職員と住民、あるいは住民同士が結束し、そこに地域の大学や地元企業のサポートを得て「地域のインフラはみんなで守る」を合言葉に、インフラに対して関心と愛着を持ち、長持ちするための活動を行えば、まだまだインフラも地域も廃れることはありません。そればかりか、こうした取り組みによって、インフラの上に成り立つ住環境、水、エネルギー、さらには医療・介護・防災といった地域づくりが進めば、ふくしま発の自立した地域づくりモデルとして国内外に発信する好機につながると考えています。

おわりに

橋のセルフメンテナンスに関する研究成果は、2012年4月に本学部土木工学科に入学した浅野和香奈さんという学生が10年かけて積み重ねてきたものです。浅野さんは、1年次から他の学生2名と共に、福島県平田村で住民と学生との協働による道づくりや橋の名付け親プロジェクトを企画・実践し、その成果を発表したところ、社会人基礎力育成グランプリにおいて準大賞を受賞しました。さらに、4年生で著者の研究室に卒業研究生として配属され、修士課程を修了するまでの3年間、橋のセルフメンテナンスモデルの構築と実践をテーマに研究してきました。この成果に対し、2018年夏、インフラメンテナンス大賞国土交通大臣賞が授与されました。修士課程修了後は橋梁コンサルタントで働きながら当研究室の客員研究員として研究活動を続け、2022年11月に博士（工学）の学位を授与されています。このように「ロハス工学」には単にロハスに関する研究成果を生み出すだけでなく、学生の教育や社会貢献にも大きな夢を描くことができると考えています。校友の皆様にはこれからも「ロハス工学」を温かく見守っていただきたく存じます。



橋のセルフメンテナンスモデルの概念図

日本大学工学部での思い出と猪苗代湖ボランティア活動



日本大学名誉教授

NPO法人

輝く猪苗代湖をつくる県民会議 理事長

中村 玄正

昭和 46 年 4 月に、講師（専任扱い）として、工学部に赴任しました。当時の工学部長は野引勇先生、学科主任は、木村喜代治先生、直接の上司は深谷宗吉教授（オリジナル設計（株）副社長）でした。衛生工学研究室（当時の土木工学の生命を衛る工学分野で、上水道、下水道、水環境工学等）には、大学院生の柴田健治さんと長沢毅司さんが修士課程 1 年生としておられ、学部 4 年生は確か 26 名であったように思います。研究室は 16 号館 2 階の西の部屋で、実験器具は何もなかった状態でしたので、卒業研究は、深谷教授と相談して、上水道、下水道の設計としました。一方、キャンパスの横を流れる阿武隈川は、上流の工場排水のため、茶色く汚濁していました。単一河川で解析しやすい点源負荷と自浄作用ということで、東北大学と東京大学そして日本大学工学部の三者で 9 月から 10 月にかけて調査しようということになり、院生のお二人や 26 名の卒業研究生のご協力を得て、上は西郷村の堀川合流点の阿武隈川から、下流は約 45km の阿久津橋まで、16 地点での採水を行いました。これが、我が研究室の河川系調査の嚆矢でした。

その後、平成 20 年に定年退職するまでの 37 年間、600 名を超える多くの小生自慢の卒業研究生の皆様や、大学院修士課程修了院生、博士課程院生等に恵まれました。また、木村先生始め、多くの先生方の暖かいご理解と御指導のお陰と心から感謝しております。一方、今思うに、実験中心主義、河川調査現場主義等であったので、学生の皆様方には、3 K - 汚い、臭い、きつい多大なご苦勞をおかけしたと、反省しつつ、残る数年を罪滅ぼし、懺悔の人生の旅を歩むべきかと悩んでいるところであります。

学祖山田顯義公の恩師「吉田松陰」師の熱い教えは、人生において生きる貴重な師表となるものと考えます。私は、「大学は研究の場」と考えていますが、一



方では、「智の仲間作り」の場であるとも考えております。そのためには、「部活」も「遊び」も重要です。当時の卒業研究生の研究テーマは次のようです。

- ①阿武隈川上流域における水質変動状況
- ②エアレーションタンクにおける気泡群と液の流動
- ③接触エアレーション法における窒素類の消長
- ④接触エアレーション法における負荷の処理や、生物膜の生成の影響について
- ⑤猪苗代湖の水質に及ぼす流入河川の影響について

平成 20 年 6 月に、「清らかな湖、美しい猪苗代湖の水環境研究協議会」が設立され、6 年の実践活動の実績をもとに、さらに責任ある組織として「NPO 法人輝く猪苗代湖をつくる県民会議」に発展し、令和 5 年の現在に続いております。平成 21 年に始めた、「猪苗代湖」の水環境保全のための「漂着水草回収ボランティア活動」は、研究は実践に結び付けて初めて、その意義があるとの考えに基づくもので、14 年にわたって継続しています。猪苗代湖の浅い北部水域には、夏季、相当量の水生植物が繁茂します。水生植物は成長時には窒素リンを吸収して水質浄化に役立ちますが、秋季から冬季にかけて枯死していくと腐食したり、微塵化し、COD（水の中の有機物）を増やすとともに、折角吸収した窒素やリンを溶出して水質汚濁を進行させてしまいます。このボランティア活動は、猪苗代湖の水環境保全上重要な実践活動と考えています。これまでに 1 万 8 千名以上の方々に参加して下さり、2 千㎡の水草量を回収しております。廣川友雄元工学部長は常々「継続は力なり」と仰っておられました。今更ながら、工学部に育った幸せは、誠に多くの学生の皆様や先生方の賜物と痛感し、心から感謝し、皆様方のご健勝とご多幸、さらに日本大学工学部と校友会のますますのご発展をを祈りしつつ、筆をおきます。



水草回収参加の卒業生とともに

学生の活躍



学生団体Chi縁

建築学科3年

永見 政悟

私たち「学生団体 Chi 縁」は、建築学科の学生を主体に、地域の人々との交流の中でまちの魅力や課題を発見し、カタチだけのデザインに留まらない、「モノ」、「コト」の広義的なデザインをすることを目標に活動する団体です。空き家のリノベーションとストリートファニチャーを中心に、郡山市・福島県で活動しています。

Chi 縁というチームを立ち上げたきっかけは、私自身が空き家のリノベーションを通して場づくりをしたいと思ったからです。また大学で学んだことを実践する環境や、社会で活動しないと気づけないことを学ぶ環境を求めていたからです。

活動から得た建築的な学びも多く、「どうやったら、人が集まる空間になるのか、何のために集まる空間なのか」と自分自身の大学授業内での設計課題に対する向き合い方が変わっていきました。

最も力を入れているプロジェクトは、「まちのたまり場（子ども食堂）」オープンのための空き家のリノベーションです。敷地のもつ可能性や子ども食堂の課題などの分析を行い、子どもたちにとって楽しい居場所、まちのたまり場として機能することで本当に必要としている子どもたちにも届くという考え方をもとに、オーナーさんと進めているところです。また、子どもたちや地域の方々と一緒にこの場所をつくり上げるために、施工を段階的に進めて、定期的にワークショップを開催しています。子どもたちとその空間のインテリアをつくったりしています。もちろん、子どもたちの手で基地をつくり上げるように思い入れをつくるのが目的ですが、私たち自身が頭の中で施工とワークショップをいったりきたりするのを繰り返しながら、子どもたちや地域の方々との時間を共有することで、本当につかわれる空間を設計することも目的です。

また、最近では建築の枠を飛び越えてより小さなス

ケールでデザインすることも増えていきました。郡山青年会議所や、福島の多くの企業のご協力のもと、様々な分野で生まれる産業ロスで、一輪挿しやストリートファニチャー（家具）も制作しています。

木材は、事業所の倉庫や作業現場で余ったものや、工業団地の廃材となった木製パレットをきれいにカンナ掛けしたものを使い、金物は施工会社が現場で余らせていたもの、お花はお花屋さんでフラワーロスとなるものをつかっています。私たちが大事にしているのは、決してロスに対して直接的に取り組みたいわけではないことです。ロスという社会問題に対して取り組むには、私たちのような小さなチームには限界があります。ただ、ワークショップなどの開催を通して、ロスでも魅せることができることを感じてもらえれば、こういった問題が身近であることに気づけると考えています。

本当の意味で学生が主体となって、自分たち自身のやりたいことをやることは大切だと考えていて、やりたいことができる環境は、私たちから見える世界をワクワクさせることができると感じています。ただ、社会でやりたいことをやるためには、大人のサポートも必要ですし、社会的な責任も出てきます。活動自体の社会的意義も必要になるでしょう。例えば、空き家のリノベーションをやりたいと思っても、自分たちの力だけでできるものではありません。大人のサポート、つまりは地域の縁があってできるもので、その縁は活動を楽しむはじまりになると考えています。

入学当初は、福島に「何もない」と思っていたのですが、私たちの「やりたい」ではじまった活動が、福島や郡山での生活を楽しくさせ、「知らなかっただけ」だったと気づかせ、少しずつ街の見え方を変えていきました。これからも自分たち自身が楽しむこと、地域の縁を大切に活動していきたいです。



日本大学工学部校友会各位

令和5年3月1日
校友会会長 中野 伍朗

令和5年度 通常総会通知

本会会則第11条により、日本大学工学部校友会令和5年度通常総会を下記の通り開催いたします。皆様には年度始めにあたりご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、多数ご出席くださいますよう、御通知申し上げます。

1. 日 時／令和5年4月22日(土) 13時より
2. 場 所／日本大学工学部 50周年記念館 3階
3. 議 題／(1) 令和4年度会務報告および決算報告
(2) 令和5年度事業計画および予算審議
(3) 役員改選
(4) その他



※但し、変更等が生じた場合はホームページに掲載または事務局にて対応致します。

第40回 母校を訪ねる会

北桜祭との連携企画であるため、開催日については現在、調整中です。決定次第、対象学年の皆様に改めてご案内状の送付及びホームページでの告知を致します（8月頃発送予定）。

住所変更について

転居、転職の際は校友会事務局までご一報をお願いします。「電話・FAX・郵便・ホームページのお問い合わせフォーム」にて随時承っております。



写真部



美術部

85号に続き、大学の写真部(山崎伊織部長)の皆様より表紙・裏表紙の写真を、美術部(大氣司部長)の皆様より挿絵を提供していただきました。発行に際しご協力いただきましたすべての皆様に対し、広報委員会より感謝申し上げます。

校友会報 第86号

発 行 者 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-1165
電話番号 024-944-1327
FAX番号 024-944-1327
URL : <https://www.nichidai-ce-koyukai.com>

発 行 部 数 13,200部
発 行 日 令和5年3月1日
発行責任者 校友会会長 中野 伍朗
編集責任者 広報委員長 千代 貞雄



●自転車置場●